

# 言語共同体と言語連続体

櫻 井 健

## 0. 導 入

われわれは、言語を基準とした集団という程度の意味合いで「言語共同体」という概念を定義なしに用い、所与のものとして捉える傾向がある。しかし現実の言語使用状況を観察してみると、よく知られた言語についてさえ、その言語共同体としての実態を捉えることはほとんどの場合不可能であることに気づかされる。たとえば、英語の言語共同体とはどこからどこまでをいうのかは、返答する個人の言語観によってまったく異なることが予想される。たしかにここで取り上げる例として英語は特殊すぎるかも知れない。使われる領域が包括的で、母語ではないにしろ、広く第二言語として用いられている地域も広大である。

物理的(地理的)境界線が明確で、言語的にも一集団一言語のような例のほうがわかりやすいだろう。筆者の知る限り、このモデルにもっとも近いのはアイスランド共和国とアイスランド語のケース、次いで日本などごく少数の国を挙げることが可能かもしれない。しかし、他言語のケースとの比較によって明白なのであるが、このようなケースは一般的ではない。一般的な国や地域などの政治的な単位を言語的に見ると、言語的なマイノリティが無視できないくらい含まれ、多数派の側の言語状況も一枚岩として記述できるものではない。たいてい歴史的背景がこのような状況が生じさせる動機となっている。

言語的単位が歴史的に確実にさかのぼれるくらい新しい集団である場合はどうだろうか？アフリカ大陸南端の南アフリカ共和国では現在2つのヨーロッパ系の言語が使用されている。一つは英語であって、これは広い英語世界の一部をなすものでもあり、また独自性のある南アフリカ英語 South African English : SAE の共同体でもある。この集団は、英語世界という視点からはその構成要素であるが、ある基準をもってすると独自の集団との認識も可能なものである<sup>(1)</sup>。いま一つの言語はアフリカーンス Afrikaans と呼ばれているもので、一般的には当初の植民者の言語であっ

た17世紀のオランダ語に由来すると考えられている。現在の使用人口は約600万人、そのうち半数は白人、残りはカラードなどと呼ばれているそれ以外の集団である。たとえば、これを一つの言語共同体、つまりアフリカーンス共同体と呼ぶことは可能なのだろうか？少なくとも南アフリカ英語の共同体との比較では、こちらのほうが高い多様性を示している<sup>(2)</sup>。歴史を考慮した場合、アフリカーンスをオランダ語と隔てるものはなんであるのか？そもそもアフリカーンスはオランダ語に由来する(アメリカ英語とイギリス英語の類の関係を示す、兄弟のような)言語と単純に考えてよいのか？このような疑問がいろいろと浮かび上がるのは、ある意味当然といえる。

アフリカーンスは、Reinecke 以来、半クレオール語 semi-creole と呼ばれてきた、ごく最近では部分的再編言語 partially restructured language という呼称を得るようになったタイプの言語である<sup>(3)</sup>。アフリカーンスが使用される環境内部の差異はこのプロセスを直接反映しており、この言語は外部から見る場合と内部からでは異なった様相を示す典型的な例である。このプロセスの解釈、つまりアフリカーンスがどのように再構成されたかを巡って、アフリカーンス話者の研究者とオランダの研究者で大きな2つの流れが生じている。前者はオランダ語由来を基盤にそれに外来要素の加わったものという解釈、後者は本来の原住民である Khoi 語話者およびその他の言語話者との接触をアフリカーンス発生の動機とする、つまりアフリカーンスはクレオールの一種であるという解釈である。想像に難くないように、前者の解釈は白人系アフリカーンス話者のアイデンティティの拠り所となってきた考え方である。近年のアパルトヘイト政策の放棄をもって、そのアイデンティティも変容し、アメリカ英語とイギリス英語とは異なるレベルではあるが、オランダ語から外因によって分岐した言語であるという解釈が一般化しつつある印象がある。

このようなアフリカーンスを母語とする集団を、(ある意味で同質だという含みをもって)一樣に一つの言語共同体と呼ぶことができるのだろうか？おそらく政治的に正しい解釈と言語的に正しい解釈は、相容れず、かついずれも完璧たりえず、しかもそれらの解釈を根拠につくる集団は必ずしも完全には重なり合わないだろう。これは政治的集団と言語的集団を作り上げる手法が歴史的に前後して登場したことを反映している。古くは社会契約論などから作り上げられてきた政治的単位としての近代国家は、根

拠とすべき「自然状態」の集団として、当時の西ヨーロッパの言語的分布を前提としていたのだろう。もちろん言語集団としての自然状態などということは想定されてはいなかった。

本論文では、このようなことを考える基盤としての話者グループと言語共同体の定義を行い、問題点の明確化を図ることを目的としたい。

## 1. 変化の連続性

クレオール化などの言語接触に起因する分岐や収束といった現象は、さまざまなレベルで表面化する<sup>(4)</sup>。バルカン半島を代表的な例とする言語連合 Sprachbund に認められる特性などは収束によるものである。

このような地域的特性としての言語連合が異なった言語間で生じるならば、影響のおよぶ範囲は比較的明白で識別しやすいが、ある言語内部でこのような現象が生じた場合には、これほど明白に捉えられるものではない。ところがクレオール言語では、こうした差異がある種の社会的階層を直接反映する形で観察される可能性がある。たとえば次の図1に示すガイアナ・

The Guyanese Creole Continuum			
			basilect
mi		gii	am
mi			
mi	bin	gii	am
mi	bin	gii	ii
mi	di	gi	ii
mi	di	gi	hii
a	di	gi	ii
a	did	gi	ii
a	did	giv	ii
a	did	give	hii
a		giv	ii
a		giv	im
a		giv	him
a		geev	ii
a		geev	im
a		geev	him
I		gave	him
			acrolect

図1 (de Rooij 1994 : 54)

クレオール Guyanese Creole 語における階層化はその典型例である。話者グループの2つの端である上層語 *acrolect* と下層語 *basilect* は語彙供給言語 *lexifier language* からの距離を示している。前者はこの語彙供給言語の一地域変種であるとみなされるのに対して、後者はここからもっとも離れた、いわば典型的なクレオールとみなされる<sup>(5)</sup>。

クレオールや混成言語を生成するような言語使用環境では、言語使用そのものが社会的環境の直接的な要因となっている<sup>(6)</sup>。アフリカーンスの話者グループ内部の多様性にはこのような成立時の社会的要件が関与している蓋然性は高い。

## 2. 「言語共同体」

この節では言語共同体という概念についての検討と定義を試みる。言語学の世界では、Bloomfield(1933)における先駆的取扱いをはじめとして、言語共同体の定義はさまざまになされている<sup>(7)</sup>。Bloomfield の定義は次の通りである(1933: 42)：

A speech community is a group of people who interact by means of speech.

この定義の問題点は、言語的手段がある特定言語には限定されないことにある。この結果、として、たとえば多言語使用状況が定義されなくなるような事態が生じる。これに対して、Gumperz(1968)は共同体内部と外部との違いに着目した定義によって、このような曖昧さを排除しようと試みている：

the speech community: any human aggregate characterised by regular and frequent interaction by means of a shared body of verbal signs and set off from similar aggregates by significant differences in language use.

共同体間の違いが言語的相互作用の有無によって規定されている点で、ブルームフィールドの定義の曖昧さは排除できている。しかしながら、言

語共同体は言語的事実によって成立しているのであり、この定義のみで言語共同体を現実化することはきわめて困難である。言語的基準によって言語共同体を定義する以上、どちらが先かという問題となってしまう、結果的に堂々巡りに陥ることを免れない。

現代の言語共同体の標準的定義は、たとえば言語と方言を区別するのと同じレベルの、言語的事実というよりもむしろ所与の言語に対する態度を反映したものとなっている。前項で示したガイアナ・クレオール語の例における上層語や下層語という概念はそれを象徴する名づけといえる<sup>(8)</sup>。

言語を共通項とする言語共同体という概念に対しては、つねに現代的な解釈が可能とはいえないという問題もある。言語への意識はそれを喚起する機会なしには表面化しないからである。たしかに現代社会では、イリイチのいう広い意味での言語教育(以下言語教育)と呼ばれる行為は、きわめて広い範囲で、ある程度普遍的といえるレベルでおこなわれている<sup>(9)</sup>。このことを踏まえれば、言語への意識は現代においてはかなり普遍的に喚起されているといえる。それが正であるか負であるかは問わないとしても、言語への意識が喚起されていることは、現代を特徴づけているものの一つであることを疑う余地はない<sup>(10)</sup>。

われわれが考えるような、今日的な個人の言語を基盤とした帰属意識は、ここに発生の根拠を持っている。これに根拠があるために、“人間は生まれながらにしてある言語共同体に所属しているものである”というような先入観に基づく解釈には通常疑問を抱かなくなっている。しかし、上述のように言語への意識を喚起されていない状態は想定しうる。したがって、いわゆる言語共同体が存在するか、あるいはどのような環境で創出されるのか、という点についての議論なしに、上のような解釈をそのまま受け入れることは不可能である。

ここでは暫定的ではあるが、

言語共同体とは、個人間に共通した共同体観としての抽象的な中心である“言語”を含む心理的存在である。

と規定しておきたい。要は、“言語”とはすでにそれを持っていることが所与の社会が作るものだ、という作業仮説の採用である。ある言語共同体にかかわる自己性・他者性の判断については、最小単位つまり個人レベル

から想定する必要がある。マクロ的にのみ解釈すると不都合が生じるためこうするのであるが、この不都合については後述する。言語教育という行為は、対象たる個人に言語共同体から“言語”の存在を確認させるというプロセスを、任務として与えられている。これは静的ではなく動的なプロセスである。構成員が依るべき“言語”を認識する、いわば求心的言語観を共通して与えられるからこそ言語共同体は意識化され、次の世代の言語観生成に関与する。“生まれながらにして”が示すのは、この言語観生成の循環に置かれるということにほかならない。

### 3. 言語教育と識字

これまで述べてきたような言語観は、ヨーロッパにおいてはイリイチのいう希少性や識字観に連なるものである。とくにイリイチは、ヨーロッパ化つまり近代化は希少性と結びついた識字を源流とする、と考えている点を強調したい。イリイチにとって、希少性を指向した教育は、学習として理解されるべきものである<sup>(11)</sup>。この学習については Gee(1991)との関連で後述する。

今となっては、西洋近代化は資本主義化とほぼ同義となっていて、何を考察するにしても、当然そこに至る社会的変動については考慮されなくてはならないし、言語について言えば、社会的変動と言語観との相関についても考える必要がある。Nation は、西欧近代化のきわめて重要な概念であることは明らかである。西ヨーロッパでは言語を単位として集団が形成され、それが国民国家を指向することと一体化することで nation として認知されてきた。ここでは唐突に言語観を与えられることはなく、自発的・漸進的に言語観が成立してゆくのであるから、言語観生成の循環の概念とは矛盾しない。

ところで言語教育という行為は無意識的なものではない。現代においてそれを提供するグループは基本的にそのことに気づいている。逆にいえばこのような言語教育を想定できない過去の状況では、現代的解釈は単純に許されないのである。それならば共時的にはつねに現代解釈が認められるかといえ、前述のように言語教育は選択的であるので、単純にそうともいえない。たとえばユニセフのような国際機関による援助で、国際的に認知されるようなタイプの教育を、外部から与えられる形で言語教育という

概念を得るグループを考えてみる。言語教育を通して表面化する帰属意識は、外部から与えられたもので、自発的なものとはいえない。このように与えられた集団は、一義的には言語観生成の循環には置かれるのだから、そこで生じた帰属意識は“生まれながらにして”あるわけでないことになる。

言語共同体という概念は外部からのマクロ的観察によってのみ正当化されるべきではない。最初に述べたように、われわれのような観察者はバイアスを持っているのだから、これは当然である。外的な規定は、観察者の言語観生成の結果つまり観察者の眼を通すという過程を経なければ不可能であり、どのようなものか不明である内部における個人の言語観(というものが存在するとして)は結果として無視された状態でなされる。過去の状況を判断する場合にも、同じような危険が存在する。たとえば、古代末期におけるラテン語共同体というものを、現代の英語共同体と直接同じ範疇として捉えることが無謀であることは、実際にはこうした無謀な試みはしばしば見受けられるものであるとしても、明らかである。このような危険を回避するためには、いわゆる言語共同体の外的(今日的)規定の再検討がまず必要であろう。さらに、それと対比されるべき内的な自律性をなんらかのかたちで規定する必要もあるだろう。

#### 4. 文字のはたすもの

ところで文字の有無は、現代の言語共同体の要素としてきわめて重要である。Goody and Watt(1968), Goody(1977)あるいは Ong(1982)などによって提唱された大分水嶺仮説<sup>(12)</sup>は、文字、とくにもっとも抽象的文字であるアルファベットが、抽象的思考、つまり、より高い知的精神活動をもたらしたとするものである。今日ではこれはヨーロッパ中心主義として、また読み書きと知的能力の結びつきとに関する認知科学的検証によって批判されている<sup>(13)</sup>。文字が知的能力に直接影響するのではなく、文字を使用する状況が定量的に存在することが知的能力発達へのパラメータとして作用する証拠が多く示されているのである<sup>(14)</sup>。アルファベットこそが到達すべき文字のタイプであり、それ以外の文字を背景としては西洋的な文脈での抽象的概念は成立しえない、という偏見への反発がこれらの批判の動機であったことはいうまでもない<sup>(15)</sup>。

人間の用いる文字としてわれわれが考える範囲において、ギリシャ文字などの表音アルファベットは一種の究極である。文字を持たない種族が最近になって文字(を持つ種族)と接触した例の報告が数多くなされている。このような接触を契機に文字使用が開始された場合、文字は接触する対象の文字がなんであれ、例外なくアルファベットのすなわち分析的には用いられず、音節なりなんりの当該言語の意味的単位に対応して使用されるという<sup>(16)</sup>。この現象を踏まえて考えれば、文字とはなんらかの表意的概念から、必然的にアルファベットの表音文字に向かって発達するものである可能性が高いといわざるを得ない<sup>(17)</sup>。

純粹にエコロジカルな視点を最優先するなら、無文字の種族に対する接触にあたっては、その種族が文字を発明し、そこからアルファベットの表音文字に発達するまで、どんな形であれ表音文字を使用することは避けるべきである。今日、アルファベットの存在はある意味で暴力的であり、その点はとくに90年代のアメリカにおいてPC運動と結びついて活発な議論の対象となった<sup>(18)</sup>。しかし、いずれの文字にしても、純粹につまり他の文字使用とまったく無関係に発達したと想定するのも現実を反映していない。

文字の歴史が示しているのは、文字の“発達”の動機には必ずといってよいほど異文化接触が想定されるという事実である<sup>(19)</sup>。ギリシャにおいてアルファベット化が完成したのはある意味で偶然であり、それによってギリシャは抽象的概念を生み出す土壌を現出できた。しかし抽象的概念はアルファベットを持つ土壌にのみ現出するのではないことは、漢字文化やインド文字とその哲学との関連を考えれば明らかである。もちろんヨーロッパ文化の出発点としてのギリシャが、アルファベットの完成を動機として抽象的概念を持つ知的精神活動へと達したことは事実として述べることができるだろう。

アルファベットへの抽象化が進行している場合、それだけで終わるとは考えにくい。この次のステップとして、断片化された言語的要素の論理的再構築が予想される。むしろ抽象化が準備段階なのかもしれない。かりに言語的要素が当該言語に論理的再構築に対して必要にして十分に抽象化されているならば、ギリシャのアルファベットのように完全な表音的アルファベット化がなされている必要はかならずしもない。たとえば古代インドはその例であるが、現実的には抽象化の進行は論理的再構築に対して優



先的であるとも思える<sup>(20)</sup>。そして文字化されていない言語が文法を持つことはまず想定できない。一般的な意味での“文法”とはこの再構築の所産であることはいうまでもない。おそらくは、文法という概念の成立によってのみ、言語に対する抽象的な態度が可能となる。この循環が進行すればするだけ記述的文法としての成熟も進行し、さらに抽象的概念の言語化に対する正当な評価基準を得ることへと発展する。この点で、ギリシャ哲学はギリシャ語とその文法とが示すに至った抽象性に多くを負っているということができる。

ギリシャにおける文法は、古代としては条件が理想に近い形に整っていたために最大限高度に発達した。抽象性が高く、したがって適応性も高かった。ギリシャ文法が周辺への文化的伝播に付随して広がっていったのは、文法としての完成度の高さが大きく寄与したためである。ギリシャ文明の発達が他の種族との接触に動機づけられていることはあえて指摘するまでもないが、ギリシャにおける文法の完成に対してもこのような接触は当然寄与していると考えられる。ギリシャ文法の外的インパクトに対する耐性の高さは、それを生み出したギリシャ社会の性質を背景としていると解釈できよう。

## 5. 「言語連続体」

これまで、言語共同体あるいは言語観への意識に関与する重要な要素として、文字と文法についてモデル化をおこないつつ簡単に述べてきた。先に、言語共同体を個人間に共通した共同体観としての抽象的な中心である“言語”を含む心理的存在であると暫定的に規定した。抽象的中心としての言語は、文字によって実体化される。文字を手にいれた者は、その学習を通して学習することを習得し、(抽象的に)言語を中心とする総体に自己を投影することが可能となる。そしてそれにより、言語的他者に対して言語運用に基づかない言語的他者性を確認することになる。言語運用的に同じである者の間には文字を運用できるかどうかの基準が生じるが、文字運用者は、言語運用的に異なる者を言語を通して区別すること、つまり自分のグループと他との境界を抽象的な中心である言語の通用範囲の問題として認識することができるようになる。この暫定的規定は、こうした段階にいたる以前には抽象的な言語観が生じていないのだから(文化人類学的

にはともかくも、言語学的には)あまり意味を持たない。その段階では言語運用における交換可能性のみが同じグループへの帰属の判断基準である。もちろん、言語運用における同じグループへの帰属意識と社会的な共同体意識とを明確に区別することはできないが、もっとも現代的な意味で用いられる言語共同体への帰属意識とこれとを同一水準で比較することもまた無謀であろう。抽象的な言語を実体化するデバイスとしての文字は、両者の区別においてきわめて重要な位置を占める<sup>(21)</sup>。

以上を踏まえて、これ以降、言語共同体という概念は、抽象的言語観を持つグループに対してのみ適用する。言語共同体は典型的には文字化のプロセスを通して創出する。文字化は言語共同体の創出の必要条件ではないにしても、これとかなりの程度近似的な指標である。

一方、抽象的な中心としての言語を持たないグループについては、言語連続体 *speech continuum* という名称を与えることとする。ここでは、基本的に言語運用における同一性は、個別間の関係の集合として生じている。言語に対する求心性は必要とされず、運用者別間の関係は水平的である。これに対して、言語共同体では言語に対する求心性が必要となるため、垂直的な関係も想定できる。とりわけ文字が限定されたグループにのみ運用されているような場合、垂直的關係はそのままなんらかの社会的階層化と結びつく可能性があることに注目すべきである。もちろん言語連続体としての性格は完全に消滅しているわけではないので、個別間の集合の結果である同一性は存在する。ただ言語の求心性に意識がある者は、その連続体が他の連続体と異なることを理解するのである。その結果、求心性を中心とする言語共同体を意識の中に構築する。一方言語の求心性に意識がない者は、内的には言語連続体の一部でありつつけるが、外的には本人のうかがい知らないところで言語共同体の構成要素となる。この二重構造は、求心的な言語観をより共通して与えられることで言語共同体が意識化され次の世代の言語観生成に関与する、という言語観生成の循環プロセスによって、最終的には同質となるはずの言語共同体に吸収される方向性を持つ。ただしその前提として、外的にも内的にも言語共同体の構成要素であるグループが、言語教育を意識しそれを導入することを通して言語共同体の構成員への言語の求心性に対する意識の一般化・均質化を意図している必要がある。この意図が抑制されている限り二重構造は維持されるし、逆に二重構造を維持するために、たとえば権威の維持を目的として言語の求心性

への意識の拡大を意図することもあるだろう。

二重構造を含む言語共同体における連続体と共同体の関係は、双方向ではないにしても境界を持つという意味で、2つの文化間の接触と似た側面を持つ。これらを図2のように模式化して示すことができる。

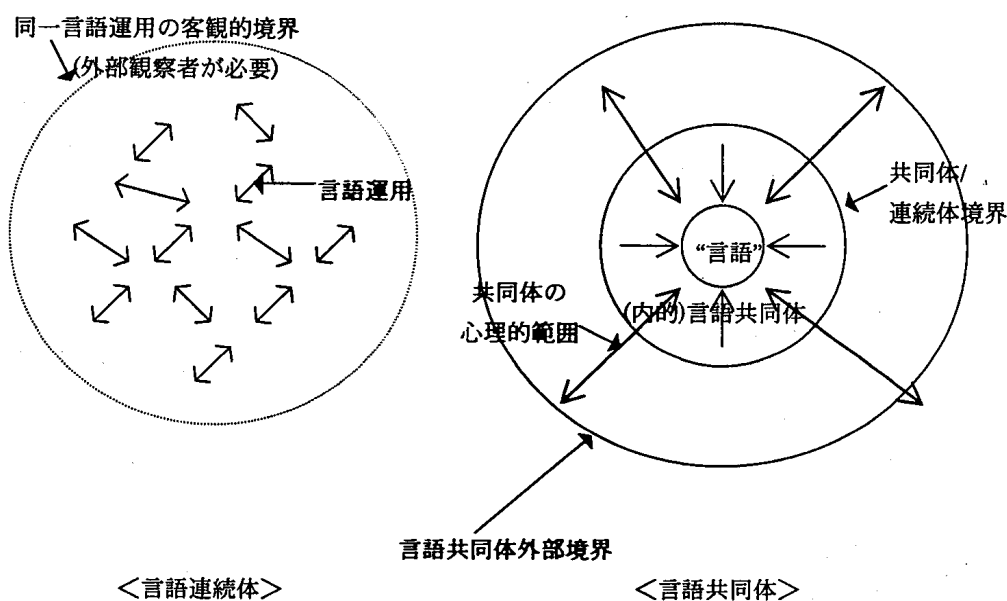


図2

言語連続体にしろ言語共同体にしろ、個人が帰属するのは一つとは限らないことに留意しなければならない。明らかな言語境界線領域で2つの言語連続体が接触する場合を考えてみる。この境界領域の両側に、二言語運用が特性となっているグループが言語連続体を形成する(境界の両側で二言語運用の程度が異なるとする)。それぞれの一言語運用の地域へと漸進的に連続体が連続し、それぞれの個人には、言語運用における同一性が個別間の関係の集合を生じさせることが保証されている。外部から観察した場合の境界が境界線以外では明確ではないが、連続体の視点からはこの点は問題とならない。連続体同士の接触で、言語境界線が社会的な境界であると認定され、本来相互に他者的ではないにもかかわらず接触する連続体に緊張関係が生じるならば、それは言語以外のレベルの社会的な求心力が働いているものと考えられる。

## 6. 文 法

これまでに、言語共同体に必須のファクタとして文字と文法を挙げてきた。しかしながら文法という概念の定義を一切してこなかった。いわゆる文法が言語共同体内部において自律的に発達した現実の例はきわめて限られており<sup>(22)</sup>、モデルとしては、外部から導入される自律的ではない場合を想定するのが一般的であろう。その場合、導入されることによるインパクトを考慮する必要がある。問題なのは、これに対する評価基準が受け入れ側の定義のないままでは設定しえないことである。ここまで文法について触れないできたのはこのような理由による。

文字は典型的には受動的に移植されるものであるのに対して、文法は能動的に導入されるものである。言語共同体の自律性に対して、後者は(異物として)より強い影響力を示すだろう。文法の成立は、自然に成立してしまう性質の言語運用そのものと比較すれば、少なくともより社会的な要件を背景として要求する。逆にいえば、文法には、言語共同体の二重構造が強固であればそれだけ統制・制御が容易な性質があるということに他ならない。

ところで、いまここで用いている文法という概念の起源は古代ギリシャにある。記述、分析的であり、言語に対する抽象性を指向している。フェニキア人から借用したアルファベットをよりギリシャ語に適合させた結果、ほぼ完璧なアルファベットが完成した。このアルファベットによって語という概念が明確化され、語を構成する音、語の変化、語の連続といった分節によるギリシャ語の分析が文法という名のもとに行われるようになった。これを一般化して文法と呼ぶのは、あまりにもギリシャ語という環境に依拠しすぎているため、不適切であろう。たとえば語の概念が類型的にも明白なこと、語の境界が明瞭で語内部の形態的变化が豊富であること、語の連続に見られる法則性が複雑なこと、などはギリシャ語の特性としてすぐに指摘できるが、このような特性がまったく見られないような言語の場合、たとえ文法が成立しても、けっしてギリシャ文法のようなものは生み出されない。さらにいわゆるギリシャ文法は強い規範性を示しており、その後の言語の変化を固定的に導いた側面があることにも注意を払うべきである。

ギリシャ語共同体におけるギリシャ文法の成立は十分に自律的であり、

その意味で正当に評価すべきものである。しかしこの正当性は普遍的なものではない。どのような言語共同体にもギリシャ語がそうであるような正当な文法を創出する可能性はある。たとえば Gee(1991)はリテラシー Literacy について、彼の理論の中心をなすディスコース Discourses という概念がそれぞれの社会において理解されなければならないということを主張するなかで、それぞれの社会が公平に獲得すべきものと捉えている。また Gee は、あるディスコースは社会の特定の集団を構成するという内的・外的認識と結びつくためにイデオロギー化の可能性を持つものであって、他者に対する共同体の階層性の発生はこのような動機を持ちうのだ主張する。本論で用いている文法という概念には Gee のいうリテラシーとディスコースそれぞれに関わる側面を担う。正当な文法を創出するとは、イデオロギーから自由なディスコースにおいてリテラシーを獲得することと同義である。ギリシャ語共同体におけるギリシャ文法の成立は正当であると評価できるが、ギリシャ文法を導入することはイデオロギーから自由なディスコースにおけるリテラシーの獲得とはなりえないだろう。

Gee(1991)のいう習得 acquisition と学習 learning, さらに第1と第2ディスコースとの差は本論でいう言語連続体と言語共同体との差に帰することができる。二重構造が解消するとは、これらのディスコースがより多くの部分で重なってゆく過程に他ならない。しかしながら二重構造が存在している以上、共同体は連続体に対して圧倒的に有利な位置にある。文法は二重構造と結びつく場合にきわめて強いインパクトを持ちうると考えられる。そしてそれは社会的な階層と、つまりなんらかのイデオロギーと結合し、習得と学習の重ならない部分に作用するのである。

## 7. おわりに

歴史的に完成したギリシャ文法は、他からのインパクトに対して強い耐性を示したと考えられるが、だからといって普遍的であることにはならない。なぜならすべては古代地中海社会という限定的環境において起きたにすぎないからである。まったく異なる世界に対してこの環境が優位であるなら、ギリシャ文法もまた(言語学的にではなく、社会的に導入される文法として)高い耐性を示すだろう。この耐性は他の言語に対しては破壊的なレベルを示すこともありうる<sup>(23)</sup>。

古代社会においてギリシャ文法からインパクトをもっとも強く受けつづけたのは、地中海社会の一構成要素であったローマ社会(ラテン語共同体)である。社会的環境および言語的環境は極端には異なっていなかったため、文法は破壊的には作用せずうまく導入されたように思える。かりにそうであっても、ギリシャ的文法概念を採用することに対して普遍的正当性を与える根拠にはならない。文字におけるアルファベットの優位性が一元的には認められなくなってきた現代の状況を考慮するとき、このことに留意する必要がある。もちろん現代の言語記述や言語学はギリシャ以来のこの伝統に連なっており、それが発展してきた環境には歴史的正当性を与えることができる。しかしこれらの無批判な適用範囲の拡大は、本来こうした伝統とは無関係であるはずの言語共同体の正常な発達に関して悪影響を与えかねない。というより、現代における言語の寡占化傾向は、他のファクタも関わってはいるけれども、この影響にほかならないのである。

文字に対しても、もちろん同様な指摘は可能なのだが、文法はより複雑に構成されているため垂直的關係に呼応するかたちで言語共同体を強く規定するものである。また垂直的關係を含まない言語連続体に対しては、新たにそれを与えることとなり、より強い影響を与えてしまう可能性がある。文字のみが与えられる場合には、言語共同体の創出に対する責任が連続体の構成員により多くかかるのに対して、文法が与えられる場合には与える側にほとんどの責任があると考えられる。

文法は、言語共同体の内部においては、言語教育を通して維持される。この意味で現代の言語共同体は文法の所産という性格を強く示すのである。言語教育は、程度の差こそあれ、ここでいう文法と表裏一体であって、言語共同体の内的結束への装置となっている。文法は求心性言語観の増幅という点できわめて強い力を持つのである。言語は普遍的に変化する特性をもつのであるが、文法の持つ規範性は通常これを抑制する方向に働く。これは実際、世界中時代地域を越えて観察できる現象となっている。現存する文法によって現代社会が言語的に寡占化状態であることは、耐性において卓越した言語が外部からのインパクトに対してきわめて強固であることを示している。文法は、それを生み出した言語共同体において免疫システムのように機能するもので、外部からのインパクトに対しては攻撃的に作用する。言語変化の観点からは、文法の導入による影響と言語共同体内部における自律的变化との関係を明らかにすることで、文法の意味を問い

直すことができるだろう<sup>(24)</sup>。

近代～現代社会においては、無批判に文法のない言語共同体あるいは言語連続体に文法の導入が行われる可能性が高くあり続けている。これに関して、需要側の文法を導入するという選択が進化的安定戦略(ESS)であることがその背景としてあることも指摘しておくべきだろう。独自の抽象的言語観の達成を基準とした評価は合理的選択と結びつかず<sup>(25)</sup>、言語共同体を西ヨーロッパ的文脈で維持することの利得がなによりも高いのは現状である。この現象は、社会全体が経済的利得という指標を独占にした90年代以降、さらに英語の独占というかたちで顕在化している<sup>(26)</sup>。とくに言語として普遍的性質を示すわけでもない英語が高い地位にあるという現象は、言語使用がある種の制度の運用でしかないことを明白に示している。明らかにある程度以上に独自の抽象的言語観を達成している言語共同体(たとえば西ヨーロッパの主要国を想定すればよいだろう)を例にとってみても、共同体外部に対しては英語使用による利得が一般的現象として卓越するようになっている。これはまさに、言語使用が環境によっては単に大きな制度の束のなかの特定の機能をもつ道具のような一要素にすぎないことを示している。現代化とは、言語の側からすれば、言語が道具であることの確認プロセスともいえる。英語が果たす役割は、ヨーロッパにおけるギリシャ文法の果たした役割とメタフォリカルな対応関係を示している。しかしながら、社会制度全体から見て、言語は他の制度に対しての相対的地位を下けているのは確実である。現代社会では、言語のみが集団のアイデンティティとして機能することは理論的にしか可能ではなくなっている。冒頭で述べたアフリカーンスの発生についても、言語共同体の持つヨーロッパ中心的な性格を考慮しつつ、慎重に再検討される必要があると思われる。純粹に言語的現象であっても、言語は運用によってつねに変動しているので、言語そのものの静的分析だけでは解釈はできないのである。

#### 注

- (1) Mufwene 2001 172
- (2) Holm 2004参照
- (3) Holm 2004 xi-xvi

- (4) Thomason and Kaufman 1988では接触による影響の言語的レベルによる差が想定されている。たとえば言語維持による影響では借用が中心的、言語シフトの状況下では音韻論的、統語論的な影響が中心的。維持する側としては自分の戦略を相手に合わせて多少変更する場合にもっとも導入しやすい分野から行う。またシフトする側としては、本来の自分の戦略のうち変更しなくても相手に受け入れられる分野が最後まで変更されずに残される。
- (5) 両者の間に移行的変種の間言語 mesolect を設定することもある。
- (6) たとえば混成言語 mixed language の生成にあたっては、code mixing が重要な役割を果たしていると考えられる。詳しくは Bakker and Muysken 1994を参照
- (7) 詳しくは Hudson 1996参照。
- (8) このような問題があるからこそ、現代における言語に対するバイアスを意識し、その影響を排除して考える必要がある。
- (9) 学校教育がおこなわれているならば、なんらかの言語教育がおこなわれていない可能性はきわめて低い。
- (10) Illich and Sanders 1989 81ff.
- (11) Illich and Sanders 1989 84ff. Illich 1993(1985) 101ff.
- (12) 茂呂1988の用語による
- (13) 茂呂1988 46ff.
- (14) たとえば Scribner and Cole 1981はそれについての先行的研究である。
- (15) しかしながら、西洋的文脈のみであれば、この偏見からは自由である。そしてただ、すべてがギリシャに端を発するという“ギリシャ問題”を再確認することになるだけであろう。
- (16) Daniels 1992 85ff.
- (17) 非分析的な有意差を示す文字は、最終的には音声学的意味での単音を指向する抽象的なアルファベットへと発達するはずである。しかしながらこの解釈は間違いなく可能世界に属するものである。なぜなら、われわれはすでにアルファベットの表音文字の存在に気づかされているのである。また近代的な教育という概念を通してこの状況は事実上地球すべてを覆うにいたっていることを忘れてはならない。それこそまだ外部には知られていない種族を想定しない限り、アルファベットとの接触は避けられない。表音文字をまったく欠く状況は現実として想定できないのである。
- (18) 菊池1995 73ff.
- (19) たとえば Auroux 1994などに詳しい
- (20) 現に古代インド以外に認められるケースはないであろう。
- (21) 抽象的思考は文字化されなければできないと主張しているのではない。抽象的言語観の生成には文字がおそらくは欠かせないということである。
- (22) いうまでもないが事実上ギリシャとインドのみと思われる。



- (23) ギリシャ文法からインパクトを受けた場合、言語連続体あるいは言語共同体は、言語運用や言語観における統一性を維持できないほどのダメージを受ける可能性がある。この点で言語連続体と言語共同体の区別を定義する際にギリシャ的文法概念を所与のものとして無批判には受け入れることはできない。
- (24) もちろん文法あるいは文字そのものに権力装置が備わっていると主張するわけではない。Derrida(1967)を見よ
- (25) 利得として“低い”というべきか、判断基準自体がそのように成立しているのかは、残念ながら明らかではない。
- (26) ただし、将来的に、英語は使用人口の少なさから地域的な寡占言語の地位に下がり、中国語やアラビア語などの言語がより広範囲に国際語として使用される予見もなりたつ。

### 参考文献

- ARENDS, Jacques, Pieter Muysken, and Norval Smith (eds) 1994 *Pidgins and Creoles An Introduction*. Amsterdam / Philadelphia : John Benjamins.
- AUROUX, Sylvain 1994 *La Révolution Technologique de la Grammatisation*. Liège : Margada.
- BAKKER, Peter, and Pieter MUYSKEN 1994 Mixed languages and language intertwinning. In Arends, J. et al. (eds) : 41–52.
- BLOOMFIELD, Leonard 1935 *Language*. Chicago: The University of Chicago Press.
- CHAMBERS, J. K. 1995 *Sociolinguistic Theory*. Oxford/Cambridge, Mass. : Blackwell.
- DANIELS, Peter T. 1992 The syllabic origin of writing and the segmental origin of the alphabet. In DOWNING, P. et al. (eds) : 83–110.
- De Rooij, Vincent. 1994 Variation. In Arendset al. (eds) : 51–64.
- DERRIDA, Jacques 1967 *De la Grammatologie*. Paris : Minuit.
- DOWNING, Pamela, Susan D. LOMA, and Michael NOONAN 1992 *The Linguistics of Literacy*, Amsterdam/Philadelphia : John Benjamins.
- FLEISCHMANN, Suzanne 1983 From pragmatics to grammar: Diachronic reflections on complex pasts and futures in Romance, *Lingua* 60 : 183–214.
- GEE, James P. 1990 *Social Linguistics and Literacy*. Ideology in Discourses. London : Falmer Press.
- GOODY, Jack 1968 *Literacy in Traditional Societies*. Cambridge : Cambridge University Press.

- 1977 *The Domestication of Savage Mind*. Cambridge: Cambridge University Press.
- GUMPERZ, J. J. 1968 The Speech Community. In *International Encyclopedia of Social Sciences*. London: Macmillan. 381-6.
- HOLM, John 1988 *Pidgins and Creoles*. Cambridge: Cambridge University Press.  
2004 *Language in Contact*. Cambridge: Cambridge University Press.
- HORROCKS, Geoffrey 1997 *Greek: A History of the Language and its Speakers*. London/New York: Routledge.
- HUDSON, R. A. 1996 *Sociolinguistics 2nd edition*. Cambridge: Cambridge University Press.
- ILLICH, Ivan 1993 *In the Vinyard of Text*. Chicago: The University of Chicago Press. 『テキストのぶどう畑で』岡部佳代訳 法政大学出版局 1995.
- ILLICH, Ivan, and Barry SANDERS 1988 *ABC: The alphabetization of the Popular Mind*. Berkeley: North Point Press. 『ABC 民衆の知性のアルファベット化』丸山直人訳 岩波書店 1991.
- 菊池久一 1995 <識字>の構造. 東京: 勁草書房
- LAW, Vivien 1997 *Grammar and Grammatians in the Early Middle Age*. London/New York: Longman
- 茂呂雄二 1988 『なぜ人は書くのか』東京: 東京大学出版会.
- MUFWENE, Salikoko S. 2001 *The Ecology of Language Evolution*. Cambridge: Cambridge University Press
- ONG, Walter J. 1982 *Orality and Literacy*, London: Methun.  
1992 Writing as a technology that restructures thought. In DOWNING, P. et al. (eds): 293-319
- RICHTER, Michael 1995 *Studies in Medieval Language and Culture*. Dublin: Four Courts Press.
- 櫻井 健 2000 a 「文法的特徴の戦略的分布について」『愛知県立大学外国語学部紀要(言語・文学編)』32: 229-48.  
2000 b 「言語の進化とフランス語の成立」『ロマンス語研究』33: 98-107.
- SCRIBNER, Sylvia and Michael COLE 1981 *The Psychology of Literacy*. Cambridge Mass: Harvard University Press.
- SEBBA, Mark 1997 *Contact Languages: Pidgins and Creoles*. London: Macmillan.
- SWAN, Toril, Endre MØRCK, and Olaf Jansen WESTVIK 1994 *Language Change and Language Structure*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- THOMASON, Sarah G. 2001 *Language Contact*. Edinburgh: Edinburgh University Press.

THOMASON, Sarah G. and Terrence KAUFMAN 1989 *Language Contact, Creolization, and Genetic Linguistics*. Berkeley/Los Angeles/London: University of California Press.